

まとめ

総括セッションのまとめ

高田 篤

総括セッション「リスク社会—発展・共識・危機」は、8月21日の9時半から、大阪大学会館の講堂で、約3時間にわたって開催された。それは、思沁夫氏、三好恵真子氏、梶谷懐氏の各報告に対し、中山竜一氏、江沛氏、潘宗億氏がそれぞれコメントするという形で行われた（通訳は許衛東氏、木村自氏；座長は高田）。

三報告は、現代中国社会におけるリスクを、環境、食品安全、経済という別々の側面から論じるものであった。そして、報告者がそれぞれ人類学、食品物性学、経済学を学的背景とし、コメンテーターもそれぞれ法理学、歴史学、政治史を専門とするなど、分析視角も様々であった。また、そもそもリスクは、中山氏のコメントが明らかにしたように、多義的な概念である。つまり、総括セッションでは、そもそも、検討内容や分析視角レベルでの共通性は志向されていなかったのであり、むしろそこにおける多様性、さまざまな可能性の提示が目指されていた。そして、それは、周到に準備された各報告によって、実現されたのである。

それにもかかわらず、本セッションを通じて、今後、現代中国社会を分析するにあたって、多くの様々な背景を持つ研究者が共に留意していく必要がある、と思われるいくつかの視点、留意点が浮かび上がってきたように思われる。

その第1は、主体、担い手という視点である。思氏は、中国の環境問題に対処する上で「草の根レベルの交流促進」、「市民中心の草の根レベルの環境

NGOによる環境保護への尽力」の意義を説いた。そして、食品の安全を社会システム論の観点から論じた三好氏は、「日中間の理解を共有する次世代の育成」を、「社会的な複雑性の縮減」にとって重要であるとした。東アジアにおいて、ナショナリズムを高揚させようとする動きが顕著な時であるからこそ、この基本的な視点は、今後の共同研究の推進にあたって常に留意される必要がある。

第2は、中国社会の動きを、「国家」レベルで、「上から」とらえるだけでは、解明することができない、ということである。思氏は、「国家を中心に環境を考えることには限界がある」と主張した。そして、三好氏は、「食や環境問題」の度合いが、「ローカルな場の多様性に依存している」ことを強調した。また、梶谷氏は、中国経済について、「中央政府」の「上からの改革」は「往々にしてうまくいかない」ことを指摘し、「意図せざるシステムの形成」のダイナミックなメカニズムによる困難の乗り越えに注目すべきであるとした。コメントでも指摘があったように、現代中国社会の分析にあたっては、国、政府、社会一般からとらえるだけではなく、中国社会の持つ多様性、底辺のダイナミズムに注目しつつそれを行うべきであろう。

第3は、時間という視点である。思氏は、土壌学者のキング博士に言及しつつ、東アジアで長い年月の間おこなわれてきた土地の生産力を維持する農法の意義を強調した。そして、梶谷氏は、「雑種幣制」と呼ばれる民国期の通貨制度と関連づけて現代の中国経済における「意図せざるシステム」を捉えようとした。中国社会については、現代のそれを観察する場合においても、現時点における現象のみを検討するだけでは、不十分にしかそれをなし得ないであろう。過去から現代までを見る、「歴史的」な捉え方が求められよう。

日本、中国、台湾の、それぞれの国の学界における中心メンバーから、これからの学問を担う若手研究者まで、さまざまな学的背景を持つ多くの多様な研究者が、これらの視点に留意しつつ研究交流、共同研究を積み上げていくなれば、現代中国社会を多層的かつ複層的に把握していくことが可能となる。それ自体が、現代の中国社会や東アジアにとって貴重な蓄積となるはずである。